

神々しく鳴りひびくフレーブニコフの一行詩

武 田 昭 文

富山大学人文学部紀要第71号抜刷

2019年8月

神々しく鳴りひびくフレーブニコフの一行詩

武 田 昭 文

僕は、ツンドラとタイガとステップが織りなす、
一つの神々しく鳴りひびく詩行に似たロシアをおもった。
フレーブニコフ『君たちに』（1909）

ロシアではもうだいぶ前から俳句が翻訳されている。ヴェーラ・マルコワ¹⁾の美しいお手本のおかげで、それらの翻訳俳句はロシア人に愛されるようになった。ロシア人にとって俳句とは、美しい三行詩のことであり、多くの人が俳句とはそういうものだとおもい込んで、今でもそうした三行詩を書いている。

しかし日本では、俳句は一行からなり、一行で書かれる。俳句の特徴は、人の意表を突く、時にきわめて斬新な語やイメージの組合せにあり、それは必ずしも西洋の抒情詩の概念とは一致しない。私がロシアの美しい抒情的な三行詩を読んで、ほとんど俳句と感じないのはそのためである。

ちなみに俳句は一行で書かれるだけでなく、さらに上から下へ書かれる。言ってみれば、俳句は縦一本垂直に、つかい棒なしに立っているのだ。

私は、俳句に最も近いのは一行詩（Моностих）であると考えている。

一行詩は、ロシアで特に人気があったことは一度もなく、今も人気があるとは言えないが、にもかかわらずこのジャンルは存在し、或る発展を遂げてきた。「蒼ざめた脚」のプリューソフ²⁾や、思わせぶりの身振りのヴァシリスク・グネードフ³⁾の実験は言うにおよばず、例えば今、

1) ヴェーラ・マルコワ（1907-1995）。ソ連時代のロシアにおける日本古典文学の翻訳の第一人者。俳句や石川啄木、芥川龍之介、川端康成の翻訳でも知られ、特にかの女による俳句と啄木の訳は、詩歌を好むロシアの文化風土の中で非常に人気を博した。

2) ヴアレリイ・プリューソフ（1873-1924）。ロシア象徴派の詩人。かれの一行詩 «О закрой свои бледные ноги.»（「おお、その蒼ざめた脚を隠せ」）（1895）は、これを「乱れた裾からのぞいた女の脚」とみる見方から、「十字架から降ろされたキリストの脚」とみる見方まで、さまざまな解釈を呼んで評判になった。

3) ヴァシリスク（本名ヴァシーリイ）・グネードフ（1890-1978）。自我未来派の詩人。代表作『芸術に死を』（1913）は15の「ポエマ」からなり、1～14の各ポエマは、表題と一行ないし一語の「詩」で出来ており、最後15の「終りのポエマ」は空白になっている。この作品を朗読する時にグネードフは、その空白をいつも或る身振りで終えたという。このグネードフの実験はしばしば、絵画におけるマレーヴィチの無対象芸術と比較される。

一行詩の作者として有名なのがヴラジーミル・ヴィシネフスキ⁴⁾である。

На этот раз тебя зовут Настасья...

今度は君の名はナスターシヤ……

面白いのは、こうした如何ようにもとれる言葉遊びとしての一行詩が、日本ではむしろ芭蕉以前の俳諧や発句にどことなく似ていることだ。その意味で、ヴィシネフスキのタイプの一行詩は俳句以前（Протохайку）と呼ぶことができる。あたかもロシアでは、まだ本当に俳句らしい俳句は生まれていないかのようである。

ところで、なぜここでフレーブニコフなのか？ フレーブニコフのテキストの黒雲（かれの長短の詩を集めた分厚い数巻はまさに黒雲のイメージを喚起する）の中には、時として目の眩むような稲妻がひらめくことがある。私が言っているのは、フレーブニコフの個々の詩行——一行一行や、稀に二行のフレーズのことである。そうした詩行は、驚嘆すべき美と、力と、表現力をもっているため、非常に多くの場合、それに続く詩行が（特にかれの長々しい作品においては）時に色褪せて、あるいは単に不必要に感じられるほどだ。

フレーブニコフの一行詩（と、そうした詩行を呼ぶことにしよう）は、私にとって本物の俳句である。あるいは少なくとも、それはヴェーラ・マルコワの翻訳や、かの女の模倣者たちによって書かれている無数の三行詩より、ずっと本物の俳句に近いものである。

フレーブニコフの一行詩が興味ぶかいのは、それが天才的な詩人で、詩におけるロシアの最も傑出したモデルニストによって書かれたからだけではない。第一にそれは、フレーブニコフは一行詩を書かなかったという事実により、興味ぶかくユニークである。ブリューソフやその他の詩人とはちがって、フレーブニコフは「さあ、これから一行詩を書くぞ！」と意気込んで机に向かい、筆を執ったわけではなかった。つまり、形式はかれにおいて予め意図されたものではなかった。我々の前にあるのは、完全に自然発生的で、こう言ってよければ、自然現象（スチヒーヤ）的な一行詩である。それは、黒雲が意図して稲妻をひき起こすのではないのと全くおなじことだ。稲妻はおのずから黒雲の中から現れて、ひらめき、その閃光によって我々の目を射るのである。

フレーブニコフは自分が一行詩を書いていることに気づかなかったという事実から、かれの

4) ヴラジーミル・ヴィシネフスキ（1953年生）。引用の詩は下記サイトを参照した。

Сайт: Лирические одностишья Владимира Вишневецкого. <http://dac.chat.ru/visn.htm>（参照 2019-04-05）

一行詩を石器時代の人々の原始的な絵や踊りや歌に譬えることもできる。人々は、自分たちが芸術の最初の一步を踏み出したことを知らなかった。かれらはマンモスや大角鹿を射止めるために呪術的行為を行っていたのであり、簡単に言えば、そうした魔術によって朝食や夕食を全力で確保しようとしたのだ。フレーブニコフも全くおなじで、自分が一行詩を作っていることを知らずに、そこに詩的エネルギーの塊を投入した。それで我々はいかれの一行詩の中に驚くべき創造力の爆発（バースト）を見るのである。なぜ、我々にはかくも旧石器時代の素朴な絵が好ましいのか？ それは、その絵の中にあらゆる魔法が、あらゆるエネルギーが、奇蹟を信じる人間の思いのすべてが込められているからだ。それと全くおなじように、フレーブニコフの一行詩の中には、強力な詩の魔法が無自覚に注ぎ込まれているのである。

では、そうしたフレーブニコフ詩のプロミネンスを見ていくことにしよう。私はフレーブニコフの長短さまざまな詩から、そうした一行詩のリストを作成してみた。引用する一行詩は、テーマ別に5つのグループ（自然、獣・鳥・虫、人々、詩人自身、ロシアとロシア人）に分かれる。私は各グループから引用を行うつもりである。

フレーブニコフの一行詩の第1のグループは——最も数の多いものだが、すべて自然に捧げられている。

Не ночлег, а живая былина Онеги. (СС. III. 316)⁵⁾

野宿じゃない、オネガ川の生きたバイリーナだ。

Усадьба ночью, Чингисхань! (СС. I. 326)

屋敷は夜にチンギスハン！

Горы мирно лежат, на лапы морды свои положив. (СП. III. 185)

山々は前脚に頭をのせてノンビリと寝ている。

Вечерний рынок.

Вороньи яйца! (СП. I. 237)

夕べの市場。

5) 以下、フレーブニコフの作品からの引用は、Хлебников В. *Собрание произведений: в 5 т.*, Л., 1928-1933 (СПと略)、および Хлебников В. *Собрание сочинений: в 6 т.*, М., 2000-2006 (ССと略) の2つの選集に基づいて行い、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表記する。

カラスの卵！

これらは本質的に物や風景のスケッチ、つまり写生である。俳句に近いだろうか？ もちろん、近い。なぜなら俳句が最も得意とするテーマも自然だからだ。

これらのフレイブニコフの一行詩において重要なのは何か？ 本物のすばらしい一行詩とは、一行の中で起こる凄まじい詩的エネルギーの凝縮であり、それは本当に、私がすでに述べたように、真のプロミネンスや強力な放電現象に譬えうるものである。これらのフレイブニコフの一行詩は、何がかれの才能から最も明るい火花を打ちだすかを我々に教えてくれる。それは、自然である——自然が最も多く頻繁にフレイブニコフに靈感をあたえるのだ。

何がまずここで我々の注意を惹くだろうか？ 水のエレメントである。水は常に自由のシンボルとしてフレイブニコフを魅了してやまなかった。大河の風景、海の風景、それは恐らく故郷アストラハンで育った少年の日から、ヴォルガ川とカスピ海の輝きとして詩人の眼に焼き付いて離れなかったものだろう。かれはそうした風景を詩の中で甦らせることを愛した。

フレイブニコフの一行詩には、かれの創作方法と詩的手法の特徴がとりわけはっきりと現れている。ロシアの詩と文学では、伝統的に自然が常に人の感情や心と結びつけられてきた。これはフォークロアにまで遡る古い伝統である。フレイブニコフもまたこの伝統を受け継いで、自然を擬人化するが、それにとどまらず伝統を大胆に発展させる。詩人は、自然を単に擬人化するのではなく、それをさらに具体化して、或る一人のだれもが知っている歴史上の人物と結びつけるのである。

屋敷は夜にチンギスハン！

人名句は俳句にもある⁶⁾が、基本的には稀で、大抵は故人の忌日（子規俳、啄木忌など）を季語として用いた忌日句となっている。フレイブニコフのように或る情景を具体的な人物（チンギスハン）に譬えることは、俳句では殆どない。仮にフレイブニコフが日本の詩歌を知っていても、それはここではあまり参考にならなかっただろう。自然や風景を歴史上の人物と結びつけて描写するのは、フレイブニコフ独自の手法である。

フレイブニコフの一行詩の第1のグループには、自然や都市の風景を切り取ったものの他に、

6) 現代俳句で、忌日句でなく有名なのは例えば次の西東三鬼の句である。

「露人ワシコフ叫びて石榴打ち落す」

「龐大なる王氏の昼寝端午の日」

「陳氏来て家去れといふクリスマス」

これらの句がいずれも外国人の個人名を出しているのは面白い。

しばしば20世紀初めの歴史的イベントと結びついた詩的考察やスケッチが含まれる。それに対して俳句は、そうした大きな出来事を取り上げるのを避ける傾向がある。それは俳句より短歌の領分である。

フレーブニコフの一行詩と俳句の詩学は、自然を主要なテーマにする点において似ているが、その一方でフレーブニコフの一行詩には、ここまでに見たように俳句にはない特徴がある。

フレーブニコフの一行詩と日本の俳句の比較を続けるために、ここで俳句の基本的な型について確認しておこう。俳句は伝統的に次の2つ（ないし3つ）の型に分けられる。

1. 二物取合せ：一句の中で二つの事物（主に、季語と別のモノ・コト）を取り合わせること。
「二つの違った物をドッキングさせて詠む型」⁷⁾で、二物衝撃とも言う。
2. 一物仕立て：上から下へ「黄金を打ちのべたる如く」（芭蕉）、一つのテーマで詠み下した句型⁸⁾。つまり、他の事物と取り合わせずに、一つの季語に集中してその状態や動作を詠んだものである。
3. その他：自由律や無季の現代俳句のさまざまな試みをここに含めたい。

この分類法からもわかるように、日本の俳句は季語を中心にして詠まれるものである。しかし西洋の一行詩には、同様の季語の決まりはない。一行詩はあくまで俳句ではないのだから、これはあたり前である。それゆえ、フレーブニコフの詩と俳句の実験的比較を行う本稿では、季語をテーマと読み換えることで一行詩に応用し、一行詩におけるテーマの構成ないし配合を見る準拠枠とすることにしたい。

さて、こうした俳句の分類法はそのままフレーブニコフの一行詩にあてはめることができる。

興味ぶかいのは、俳句では「二物取合せ」の型が圧倒的に多いのに対して、フレーブニコフの一行詩では、「一物仕立て」にあたる詩的断言の方により優れた表現があることだ。私の見るところ、フレーブニコフのそうした簡潔な定義への情熱は、かれが熱中した数学における公式とアナロジーの関係にある。が、この問題については後でまた取り上げることにしよう。

フレーブニコフの一行詩の第2のグループに移ろう。このグループに含まれるのは——獣や鳥、虫などの動物たちである。このテーマにおいてフレーブニコフは、日本の俳人にも劣らぬ鋭い観察力を発揮している。

С червем во рту сидела пташка. (СС. III. 94)

ミミズをくわえて小鳥が止まっていた。

7) 辻桃子『あなたの俳句はなぜ佳作どまりなのか』（新潮文庫、2008年）、97-98頁。

8) 前掲書、97頁。

Уста коней кипели. (СС. I. 122)

馬たちの口が煮立った。

Муха! нежное слово, красивое... (СС. I. 287)

はえ、なんと優しい響きの語だろう！ 美しい……

Из моря плюётся в небо кит,

Без смысла тёмн и красив. (СС. I. 216-217)

海から空へ鯨が潮を吹き上げる、

意味もなく暗く美しく。

西洋やロシアの詩ではあまりお目にかかることのない、こうしたくっきりした動物たちの描写を読むと、私はいつも昔の博物学や動物学の本の写実的で細密な挿絵をおもい出す。19世紀末から20世紀初めのロシアで最もよく読まれた動物学の図鑑は、ドイツの動物学者で作家のアルフレート・ブレームの『動物事典』⁹⁾ だった。

第2のグループの一行詩におけるフレーブニコフは、まさに動物画家のようだ。かれの描く獣や鳥や虫のポートレートは、非常に鮮明で、同時にとても正確である。私は、こうした鮮明さと正確さは、実際にブレームの『動物事典』と関係があるのではないかと考えている。フレーブニコフの父は鳥類学者で、家には豊富な蔵書があった。そこには必ずやブレームの本も含まれていたことだろう。私には、フレーブニコフがきっと幼い時から、ブレームの本のすばらしい挿絵に見入っていたようにおもわれるのである¹⁰⁾。

フレーブニコフが最も愛した生きものは何だったろうか？ かれの一行詩からは、それが鳥と馬であったことがわかる。家畜はずっと少なく、野生動物にいたっては殆んど出てこない。

9) アルフレート・ブレーム (1829-1884) の『動物事典』は、ロシアでは«Жизнь животных»の題名で、すでに1866-1876年に原著初版の翻訳が刊行されており、1892年と1894年には第3版からの翻訳が刊行されている。

Брем, А. Э. *Жизнь животных: в 6 т. / Под ред. В. О. Ковалевского*, СПб., 1866-1876.

Брем, А. Э. *Жизнь животных: в 10 т. / Под ред. К. К. Сент-Илера*, СПб., 1892. (2-ое изд. 1894)

10) ところが、サイト《フレーブニコフの世界》に公表されている「フレーブニコフ家の蔵書リスト」には、このブレームの本が入っていない！

Сайт: Мир Велимира Хлебникова. <http://hlebnikov.ru/archives/> (参照 2019-04-05)

だがフレーブニコフが学んだギムナジウムの図書館には、きっとブレームの『動物事典』があったのではなからうか。同サイトの「蔵書リスト」には、少なからぬ数の博物学の本が含まれている。そうした本の中の挿絵と、フレーブニコフの詩における「動物の世界」を比較する研究は恐らく可能である。

ロシアの昔話やフォークロアでおなじみの熊や狼、総じてロシアの森の伝統的な住民たちは、フレーブニコフの詩にはあまり出てこないのである。ここでもまた、詩人が生い育ったアストラハン——かれ自身の言葉を借りれば、ロシアのエジプト——の特異な自然が物を言っている。我々は、どんな生きものがフレーブニコフの心に特に近しかったかを見る。俳句におけるのおなじように、かれの注視がそそがれたのはまず小さな生きものたちに対してだった。

だがその一方で、フレーブニコフの一行詩には、鯨や馬、牝牛といった、俳句にはあまり合わない大きな生きものたちも登場する。これにはもちろん、（私がおもうに）大きなものに対するロシア人の特別な愛が現れている。俳句の世界では、小さな生きものたちが感じやすい優美なものに変容する。我々は、ふつうなら目に見えないものを、まるで魔法のルーペで見ると見るのである。そうした例を現代俳句から引用しよう。

油蟬鳴けば鳴くほどかるくなる¹¹⁾ 保坂敏子

翔ち翔てる蝶の頭は鈴ならむ¹²⁾ 三橋敏雄

フレーブニコフの一行詩の第3のグループは、人々のポートレートである。

Кудри длинные повисли,
Точно звуки скрипача. (СП. I. 69)
長い巻毛がはらりと落ちた、
まるでヴァイオリンの音色のように。

Какие синие глаза!
Сошли ли наземь образа? (СС. III. 200)
なんと青い眼だろう！
聖像が地に落ちてきたのだろうか？

Волги синяя овчина
На плечах богатыря. (СС. III. 357)
ヴォルガ川の青い羊毛が

11) 小林恭二『実用 青春俳句講座』（ちくま文庫、1999年）、110頁。

12) 前掲書、155頁。

ボガティーリの肩にのっていた。

これらのポートレートはどんな点で興味ぶかいか？ 大抵の場合、それは全身像ではない。フレーブニコフの関心を引くのはまず顔であり、あるいはその人物を最も鮮やかに特徴づける外見や衣服の重要なディテールである。

ヴォルガ川の青い羊毛が
ボガティーリの肩にのっていた。

これはステンカ・ラージンのポートレートだが、フレーブニコフはここで、ラージンとヴォルガ川の一体性を強調するために、このコサックの首領を単に川と結びつけるだけでなく、ヴォルガ川そのものをラージンの毛皮外套に変容してかれの肩にのせている。これは驚くべき壮大なポートレートである。我々の前にあるのはたった一行（正確にはワンフレーズ）の詩だが、そのポートレートは殆んどモニュメンタルな壮大さを獲得しているのである。

俳句においても、対象はその重要なディテールを通して表現される。しかし、このような壮大なポートレートはちょっとおもしろい浮かばない。

人々についての一行詩の数は、動物についての一行詩よりずっと少ない。だが、考えてみればそれも当然である。獣や鳥たちは、我々より遥かに美しいのだから。

第4のグループは、詩人自身についての一行詩である。

ふつう詩人たちにとって、自分の詩的自我（поэтическое «я»）を表現することが最も重要なテーマである。詩人はふつう抒情詩を書いて、己れ自身を第1のテーマとする。ところがフレーブニコフの場合、それが全く違う順番になっている。我々がすでに見たように、かれの一行詩の第1のテーマは自然であり、2番目は動物たちである……。そして、人々の後の、やっと4番目に詩人自身が来るのだ。フレーブニコフが叙事的な詩人であることはもうだいぶ前から言われてきた。そしてかれの一行詩もやはり——全く短い形式において——改めてかれの詩の叙事性を裏付けているのである。

ちなみに、意外におもわれるかも知れないが、俳句もまた叙事的になりうることを言い添えておこう。俳句は、旅の記録（紀行）にも、また連作として日記のようにつけられる長い詩にも、いろいろなものになる。例えば、このようにだ。

にもつは絵馬風の品川すぎている¹³⁾ 阿部完市

夏草や兵どもが夢の跡 芭蕉

フレーブニコフの己れ自身についての一行詩に関して言えば、そこでのいわば自画像における詩人のイメージは、かれの詩のあらゆる前衛性や実験性にもかかわらず、かなり伝統的なものである。

Из жизни он бежал, каким-то светом привлечённый,

Какой-то грёзой удивлённый. (СС. III. 205)

かれは人生から逃げた、何かの光に惹かれて、

何かの夢に驚いて。

...скользил конец гребёнки

На других миров ребёнке. (СС. III. 205)

.....櫛のさきが

別の世界の子の髪をとかした。

ここにあるのは、変わり者で、永遠に子どもの、典型的と言ってよいロマンチックな詩人の肖像である。だがそれもよかろう、すべての詩は伝統的であり、すべての詩人は、多かれ少なかれおなじことをくり返すとも言えるからだ。ただフレーブニコフにおいては、しばしば古い決まり文句さえも新しい輝きとともに提示されるのである。

最後の第5のグループは、ロシアとロシア人のテーマを取り上げている。このグループに入るフレーブニコフの一行詩の数は最も少ない。自然や動物や鳥たちの方が、かれにはずっと魅力的なテーマなのだ。しかしその一方で、フレーブニコフはまさにこのロシアとロシア人のテーマにおいて、かれの最上の一行詩を書いているとすることができる。

すでに指摘したように、フレーブニコフの一行詩の多くは、俳句の「一物仕立て」に近い詩的断言の形で書かれている。ここで言う詩的断言とは、定義であり、発見であり、世界の新しい公式である。(鯨や山々についての一行詩をおもい出そう。)そしてそうした磨き上げられたアフォリズム的な要約性への情熱が、何よりも鮮やかに現れているのが、この第5のグループ

13) 阿部完市『にもつは絵馬』(邑書林句集文庫, 1998年)

なのである。

Русь, ты вся поцелуй на морозе! (CC. II. 317)

ルーシよ、お前は凍てつく寒さの中の熱い口づけ！

私はこの一行詩をフレーブニコフの一行詩の最高傑作だと考える。疑いなく、これは単に優れた詩行というだけでなく、一個の完結した芸術作品である。これ以外でも、このグループに数えられる一行詩はきわめて印象的で美しい。

Я думал о России, которая сменой тундр, тайги, степей —

Похожа на один божественно-звучащий стих. (CC. I. 202-203)

僕は、ツンドラとタイガとステップが織りなす、

一つの神々しく鳴りひびく詩行に似たロシアをおもった。

フレーブニコフの他にだれが一体このようにロシアを詠むことができただろうか？

В бурю родились, плывём на авось,

Смотрим загадочно, грозно и чудно. (CC. III. 126)

嵐の中で生まれた俺たちは、風まかせに生きていく、

謎めいて、恐ろしく、目を瞠って。

これは恐らく、キエフ・ルーシについても、ソ連邦についても言えるだけでなく、今のロシアについても言うことができる——「ロシアよ、お前はどこへ行くのか?」、「なぜ、何のために怖い顔をしているのか?」、「お前はどんな未来を見ているのか?」と。

ロシアについてのフレーブニコフの一行詩を俳句と結びつけて論じるのは困難である。なぜなら日本の俳人たちは、日本と日本人というテーマではほとんど俳句を詠んでいないからだ。そのような大きなテーマを扱うのは、またしても短歌の領分である。あるいはこう言ってもよい——俳句においては、自然や日常の事物への細やかな関心が、そのまま母国への最高の愛の表現となっているのだと。ここに我々は、ロシアの詩人たちにおける母国愛の表現との大きな違いを見る。ロシアの廣大無辺の空間は、それに劣らず広く大きな愛を要求するのに対して、島国でかつ山がちな日本の限られた空間は、なにげない小さな物たちへの愛を教えると言えるかも知れない。

西洋ではすでに久しく、ロシアでは最近になって、何百頁もある小説の内容を数頁で要約した、いわゆるあらすじ本なるものが出版されるようになった。もちろん、下らないものである。しかし、フレーブニコフの一行詩を集めて本にしたらきっと面白かろう。私が本稿で引用したのは、かれの優れた一行詩のほんの一部にすぎない。フレーブニコフ詩の専門家たちは皆、自分の愛するかれの詩行をもっており、それをフレーブニコフの一行詩のコレクションにさらに加えていくことができるだろう。そうして編まれたフレーブニコフの卓越した詩行のアンソロジーは、きっと全く新しいフレーブニコフ像を読者に開示するにちがいない。そして、恐らく、新しい読者がフレーブニコフに関心をもつきっかけにもなるだろう。

あとは出版社を探すだけである。

附記

本稿は、2015年11月9～11日、モスクワで、詩人ヴェリミール・フレーブニコフの生誕130年を記念して開催された国際学会《フレーブニコフのN乗》（ロシア科学アカデミー世界文学研究所、マヤコフスキ博物館、国際ザウミ・アカデミー共催）において発表した報告原稿《Божественно-звучащие моностихи Велимира Хлебникова》を日本語に起こし、若干の加筆と修正を加えたものである。発表時には、これに筆者がフレーブニコフの一行詩40篇を選択して編んだアンソロジー《Русь, ты вся поцелуй на морозе!》を付して配布した。なお、本稿の執筆にあたっては、元富山大学人文学部教授で、詩人・作家のヴェチェスラフ・カザケーヴィチ氏に、ブレームの『動物事典』の存在をご教示いただいた他、個々の一行詩の選択にいたるまで数々の貴重なアドバイスをいただいた。記して感謝申し上げます。

主要参考文献

- Хлебников В. *Собрание произведений: в 5 т. / Под общ. ред. Ю.Тынянова и Н. Степанова*. Л.: Издательство писателей, 1928-1933.
- Хлебников В. *Собрание сочинений: в 6 т. / Под общ. ред. Р. В. Дуганова*. М.: ИМЛИ РАН, 2000-2006.
- Квятковский А. *Поэтический словарь*. М.: Советская энциклопедия, 1966.
- Басё. Бусон. Исса. *Летние травы. Японские трехстишия / Перевод с японского В. Марковой*. М.: Толк, 1993.
- Марков В. Ф. *Трактат об одностроке // О свободе в поэзии: Статьи, эссе, разное*. СПб.: Издательство Чернышева, 1994.
- Бирюков С. *Одинокая строка // Зевгма: Русская поэзия от маньеризма до постмодернизма*. М.: Наука, 1994.

Ходасевич В. *Одностишия // Книги и люди. Этюды о русской литературе*. М.: Жизнь и мысль, 2002.

阿部完市『にもつは絵馬』(邑書林句集文庫, 1998年)

宗左近『新版 さあ現代俳句へ』(東京四季出版, 1999年)

小林恭二『実用 青春俳句講座』(ちくま文庫, 1999年)

辻桃子『あなたの俳句はなぜ佳作どまりなのか』(新潮文庫, 2008年)

小林恭二『この俳句がスゴい!』(角川俳句ライブラリー, 2012年)

西東三鬼『西東三鬼全句集』(角川ソフィア文庫, 2017年)